

2004年6月シンポジウム1
日本教育工学会発展の20年を振り返る
—世代間対話—

<第3世代の立場から>

教育学

— 魅力・期待・将来の夢 —

香山瑞恵
専修大学ネットワーク情報学部

教育学と私

| | 公立女子短期大学 助手 | | | | | 独立大学院 学生/助手 | | 私立大学 助教授 | | |
|--------------|---------------------|----|----|----|----|---------------------|----|---------------------|----|--|
| | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 01 | 02 | 03 | 04 | |
| 主担当科目 | | | | | | | | 教育支援情報システム論 | | |
| 情報教育 | 情報リテラシー教育 情報科学ゼミ | | | | | 研究協力 | | 情報リテラシー教育 | | |
| 高等学校 教科情報 | カリキュラム開発 (科研究) | | | | | 研究協力 | | 教員養成 高大連携 | | |
| 学習支援 システム | 授業支援ツール 教育用コンテンツ | | | | | ナビゲーション コラボレーション | | 授業支援ツール コラボレーション | | |
| | - 91 見 | | | | | 他学会にて「教育学」セッションを第 | | | | |
| | - 92 | | | | | 第8回全国大会(茨城大)で初発表 | | | | |

第3世代の現状

- 教育現場にて -

教育学は実証的・
実践的に教育に関
連する・・・

自分が学生の
頃は教育学の講義を受け
たことない
なあ。

教育学的には、
こういった場合への
対応として・・・

自分の指導法
を教育学的に見直してみ
たこと、あつ
たなあ。

- 学会全国大会/研究会にて -

では、このセッ
ションで発表を
して下さった方々
と・・・

この前のセッ
ションでの議
論、理解でき
なかった
なあ・・・

今回ご提案するの
は、生徒の主体的
な学習活動
を・・・

自分でこの機
能を利用でき
るような教育
実践はしてな
いんだよねえ。

- 論文誌を読んでいて -

うーん、今回の
特集号は面白い
なあ。

今査読してい
る論文の主張
点には共感で
きないんだよ
ねえ。

今回の採録の条件
も厳しいなあ。ま
た教育評価だ。

評価のためだ
けの実験的学
習場を構成し
て意味あるの
かなあ。

第3世代の例

- 他の世代との関係
 - 第1世代の諸先生方が準備された環境に
 - 第2世代の諸先生方と共に築かれ、出来上がっている(ように見える)土俵に
 - あがらせていただいている世代
- 自分の捉え方
 - 教育学が「自分の世界」になりきっていない
 - 教育学における「自分のスタンス」を把握できていない
 - 教育学における「自分の研究」が確立していない

第3世代の例

教育工学には様々な価値観に基づく研究成果がある、ことは認識している。
特定セッションでは議長を務め、議論にも積極的に参加する。
各種委員会メンバなどを担当するようになっている。

しかし、やはり

- 「共感できる研究」と「目的や意義が理解できない研究」とがあり、勉強不足を自覚する・・・
- 自分のやっていることが「教育工学の研究な

悩める第3世代

- 自分のやっていることは、誰もが試みることができる程度の事柄であり、研究とはいえないのではないか。
- 自分は、ちょっとした工夫をしている教育実践者でしかないのではないか。
- 自分の研究成果は、自分の教育を改善することにすらつながっていないのではないか。

教育工学の魅力

- 広い間口と温かい支援
 - 教育を良くする試みであれば、受け入れるという学会の体制
 - 発表結果に対して、内在する教育工学的価値を指摘しようとする学会の文化
- 研究と実践との連携
 - 自らの教育実践の場が研究対象になりえる
 - 研究的視野の発展的な拡大を促進
- 「教育／訓練」の場としての科研費研究
 - 研究協力者としての参画
 - 若手研究としての提案

教育工学への期待

- e-Pedagogy の芽生え
 - 新しい世代の、教育工学者としての自覚
 - これまでの教育工学の研究成果の再考
- 教育科学／学習科学の実体の具体化
 - 科学：社会の基礎にある事柄の原理原則を発見すること
 - 工学：科学の成果を社会に貢献するように応用すること
 - 連携することで学問領域として健全に成長

とある第3世代が抱く将来の夢

- 実世界とIT環境とがシームレスにつながった学習環境
 - 教育工学研究の成果に基づく運用コーディネート
 - 教育工学研究の成果に基づく学習支援機能
- 学習科学／教育科学の発展
 - 教える／学ぶことの「科学」と「工学」の役割分担
 - 一般化される教育支援

先達が築き上げた教育工学

- 洗練され続けていく教育工学
 - 繰り返される定義付け と 体系の整理
 - 流派の存在 と ○○節の尊重
- 「教育」という特殊さの量み込み
 - 「学習観」「教育観」の存在の重さ
 - 成果の汎化の限界 と 導入技術の適用の限界
- 研究トレンドの再来への対応
 - 学習空間の設計
 - 教室での研究をIT世界に置き換えただけか

最後に・・・

- 教育工学をどのように研究してこられたのでしょうか。
- 教育工学の研究者であるという意識を自身で自覚されたのは、どういった研究成果に基づいてのことだったのでしょうか。
- 先生にとっての教育工学において、時代と共に変化したこと、変化しなかったことはどのようなことだったのでしょうか。
- 第3世代以降の学会員への期待などお聞かせいただけますでしょうか。